

『春と修羅』第二集『命令』とその背景

木村東吉

一 はじめに

『春と修羅』第二集に『命令』という一見ナンセンス・ユーモアとも見られる愉快な、そして不思議な美しさをたたえた作品がある。本稿では、その成立の背景をさぐって△心象スケッチ▽の実相に触れつつ、当時の作者の問題意識のありどころを確かめるところから、作品をそのディスクールのままに捉えてみたい。この作品はモティーフ成立の時期が『産業組合青年会』〔夜の湿気と風がさびしくいりまじり〕（下書稿（一）題名『業のはなびら』）と重なっており、詩人の生涯における一つの転機を示す作品と見られる点でも興味深いものがある。まず作品をみることにして、『春と修羅』第二集の定稿から引用する。

三三三 命令

マイナス第一中隊は

一九二四・一一・二一

午前一時に露营地を出発し
現在の松並木を南方に前進して
向ふの、

あの、
そら、

あの黒い特立樹の尖端から
右方指二本の緑の星、

あすこの泉地を経過して
市街のコロイダールな照明を攻撃せよ
第一小隊長

きさまは途中の行軍中、

そらのねむけを噛みながら行け
それから市街地近傍の、

並木に沿った沼沢には
睡蓮や蓴菜

いろいろな燐光が出没するけれども
すこしもそれにかまってはならない

いいか わかったか
命令 終り

この作品は、一九二五年九月の「銅鑼」四号に「心象スケッチ／景二篇」の総題で、『未来園からの影』（創作日付一九二五・二・一五・）とともに発表された。『校本 宮沢賢治全集』の下書稿（一）の第一形態は赤野詩稿用紙に書かれ、「大正一五年の末から昭和二年のはじめ頃」に整えられたとされているから、生前発表形の方が古いことになる。初出と下書稿（一）と定稿との間には、それぞれ若干の詩句の異同がある。

作品は、非在の軍隊の出撃命令でナンセンスであり、社会的に目立つ「泉地」や「市街のコロイダーレな照明」を攻撃目標とし、忘れられた存在の「沼沢」や「燐光」にはすこしもかまうなと細心の注意を与え、第一小隊長には「途中の行軍中、／そらのねむけを噛みながら行け」とあくびまじりの行軍を指示しているかと思える命令に、思わずにやりとして読み過ごしてしまふような作品である。

ただ、読み終えた後には、深い闇の中で黒く聳える特立樹の上に輝く「緑の星」、黒々と続く松並木のはての市街の「コロイダーレな照明」、そして足元の沼沢に微かにゆれる「燐光」が映発しあう光景が神秘的な映像をつくり、その中で響く「向ふの、／あの、／そら、」と突然格調を乱した語りかけになったり、「あすこの泉地」と訛りを含んだりする命令に、生きた人のぬくもりもあって、耳に余韻を残す作品であるといえよう。

この作品に関して宮城一男氏は、その著『宮沢賢治の生涯』で次の

ように述べている。賢治の弟清六氏が弘前の兵營に入隊し、岩木北麓の山田野演習場にいた大正十四年の秋（九月）、賢治がこれを見舞ったことにふれた後である。

また、賢治は帰花後すぐに山田野演習場をモチーフにした詩をつくっている。「命令」という題の詩である。決して軍国主義を謳歌しなかった賢治にしては、珍しく軍隊を題材にしたものである。もっとも詩句の中に「マイナス中隊」などという賢治独特の諧謔的抵抗も試みているが。

氏のこの発言には時期的錯誤があり、こんなことは伝記的にありえないが、そんなことより筆者にはまず、作品から受けとる印象が氏の解釈と違うものがある。その点を順次明らかにしていきたいが、筆者はまず、漠然と作品の舞台を花巻の北郊と捉えていたので、発言の背後に何があるのか分からぬまま、J R 五能線鳴沢駅から冬の道を山田野に訪ねてもみた。しかし、氏が『命令』の舞台に山田野を想定されたのは、軍隊のイメージからの速断であって地形が詩の情景に近いためでもないし確信しただけであった。作品を読み返して見れば、「現在の松並木を南方に前進して」「市街のコロイダーレな照明を攻撃」するには、やはり作品の舞台に花巻の北郊をイメージした方が作品の雰囲気にもふさわしいのだが決め手がなく、逆に今度は、軍隊のイメージがどこから来るのかも分からなくなったりもした。

二 作品の舞台に即して

作品の舞台が花巻北郊であると筆者に確信させたのは、「岩手日報」の記事である。これによると、一九二四年一〇月三〇日から十一月七

日まで花巻を中心にして第八師団を南軍と北軍に分け、一部学生も動員した軍事演習が行われた。十一月一日の記事には「花巻に於いて／猛烈な市街戦／夕日を浴びて／阿軍後退戦火やむ」といった見出しもみられ、二日には「演習に参加した／県立蚕業校生徒／一名の落伍者もない／任務を果たして帰校す」とある。花巻の内外は、この時兵隊が溢れていたわけで、「春と修羅 詩稿補遺」にもこの演習に取材したかと思われる「審判」がある。

この日の気象状況を見ても、「市街のコロイダレな照明」が見えやすい状況であった。屋前後に小雨、夕方以降晴れて、夕方には層雲が観測されている(後掲表1参照)。「岩手日報」のコラム記事「盛岡気象」にも、十一月三日「朝、四・九度、日中十二・四度。雨積量〇・八ミリ。前夜晴天なりしも曇り勝ちとなり日中にいたりて小雨あり。朝霧あり。」と二日の天気を記している。この年は雪が早く、一〇月二十九日から三〇日にかけて盛岡で「一夜のうちに三寸積る」初雪が降った。山には当然雪があったろう。晴れた夜の「緑の星」は冴えていたはずである。「命令」もこの実景を素材にしていることは、間違いないであろう。

実は、『命令』と作品番号が同じで、創作日付が異なる「産業組合青年会」があるため、日付は作品の素材を得た日という原則は一応認められていても、この原則がどこまで適用できるのか疑問もあったのだが、『命令』の日付の日に花巻で軍事演習があり、日付の日の気象状況が作品に正確に反映していることから、作品の日付の意味が明確になった。つまり、『産業組合青年会』と『命令』は、三二三番の番号を与えられているが、これは一〇月五日付の一連のメモ(このメモ

の番号が、多分三二三番なのであろう)から枝分れして成立した二つの作品であるためと考えられる。そのうち『命令』は一月二日付の情景のメモあるいは別稿を取り込んで成立したので、番号は元のまま、日付だけが新しい素材を得た日に改められたと考えられる。背景の気象状況は異なるが二つの作品の舞台がほぼ同じであり、モチーフに通ずるものがあるのもこのためである。この点は後にも触れるし、別に詳述しているので、ここでは結論を確認するにとどめる。

ここでは、作品をその素材の背景事実というコンテキストの中で読み直してみたわけだが、その場合、実景に基づく「命令」が意味するところはなにかも考えておかなくてはならない。「賢治独特の諧謔的抵抗」の試みとして読まれるだけの作品であろうか。読み方は読者の自由だとしても、作品成立のディスクールにそって理解しようとするなら、作品の司令官は「マイナス第一中隊」にどうして「あの黒い特立樹の尖端から／右方指二本の緑の星、／あすこの泉地を経過」するよう指示し、「市街地近傍の、／並木に沿った沼沢に」出没する「睡蓮や蓴菜／いろいろな燐光」を「かまってはならない」とくどいまで注意を与えるのか。こんな疑問にも答える必要がある。

「市街のコロイダレな照明」が攻撃目標にされるのと対比して、「睡蓮や蓴菜／いろいろな燐光」に「すこしもそれにかまってはならない」と命令が出されていること、あえて「午前一時に露宮地を出発」するよう命じられていることに注意すれば、「マイナス第一中隊」の目標は、深夜にも消えない浮華の灯にちがいない。そうだとすれば、「睡蓮や蓴菜／いろいろな燐光」が路傍の農家の灯を暗示するものであろうことは、やさしい推理である。雨雲を淫らなものと捉えるこの

詩人の常套的表現からして、「コロイダーレな照明」が浮華の灯とイメージされてもおかしくない。

付言すれば、詩人の生家にほど近い当時の花巻の歓楽街は盛岡のそれをしのぐものがあったと、清六氏からうかがったことがある。そう見れば、「第一小隊長」に「右方(つまり西方)指二本の緑の星／あすこの泉地(花巻温泉が想定される)を経過」する任務が与えられる必然性も出て来る。当時から健全娯楽のリゾート地建設を目標にした花巻温泉ではあったが、詩人は現実には花壇設計などの協力もしながら、心に拘泥するものを持ち続けていたらしく、たとえば『冬』では「灌漑水や肥料の不足な分／温泉町ができてみたりだ」とし、『悪意』下書稿(一)では「今日の設計には／あの悪魔風の鼠と赤とを使ってやろう／口をひらいた魚のかたちのアンテリナムでこさえてやらう／いまにあすこはみんな魔窟(誤字を校訂)にかはるのだから」と記した。

作品をこのように読む場合、あくびまじりに深夜の浮華の灯を攻撃する軍隊を享樂的に解釈することも、「マイナス第一中隊」こそ、眠気も嗜み殺しながら世俗に戦いを宣言した詩人の心の軍隊と解釈することも可能であろう。いずれも目前の軍隊を陽の存在とすれば、これをヒントにした心中の軍隊は陰の存在ともいえる。これが「マイナス第一中隊」の意味であろう。ただ、作品に享樂的なモチーフを見るか、俗世に戦いを挑むマニフェストとしてのそれを見るかをあえて決定する必要はないかもしれないが、作品が発表されたテキストに即して解釈してみるなら、これが類型的一般的なものを超えるものであることが確認される。次にその点を見ておこう。

三 〽負景二篇〽の意味に即して

詩人が「貌」や「銅鑼」へ同時に複数の作品を投稿した場合、その仕方に注意して見れば、総題をつけた例とつけない例があるが、この作品の場合は「心象スケッチ／負景二篇」の総題のもとに発表されている。作品二篇をセットとして読まれることを期待した形であろう。作品を発表された時のテキストにそって理解して見るなら、どうなるであろうか。「命令」とともに発表した『未来圏からの影』とは、次のような作品である。生前発表形から引用する。

未来圏からの影

一九二五・二・一五・

吹雪はひどいし

けふもすさまじい落盤だ

……どうしてあんなにひっきりなし

凍った汽笛を鳴らすのだ……

かげや恐ろしいけむりのなから

蒼ざめた人がよろよろあらはれる

それは氷の未来圏から投げられた

戦慄すべきおれの影だ

気象状況を見ると、この日の前日は終日雪が降り、この日はおおむね晴れていたらしいが午後、八メートル程度の風が出ている。午後は層雲も発生している(後掲表2参照)。ちなみにいえば、水沢では、風

が九・九メートルに達し、この月の最大風速となっている。低い雲と吹き上げる吹雪の中を走る列車に詩人が乗っていると見ると、やはり実景に基づく作品だろう。その中で「凍った汽笛」におびやかされながら、「かげや恐ろしいけむりのなかから」雪の中に「蒼ざめた人がよろよろあらはれる」のを見て、詩人はそれに自身の未来の姿の影を見たわけである。これも目前の実景を素材としながら、その情景を内面的なものの投影として受けとめているから、もはや単なる外界のスケッチではない。つまり眼前の実景に詩人の想念の中にあるものの影を認め、これを描いていることは二篇に共通する。これが△負景▽と名付けた理由であろうし、詩人の創作方法の一特色でもであろう。「マグノリアの木」で主人公諒安が「霧の底をひとり、険しい山谷の、刻みを渉」りながら、「誰か、或ひは諒安自身が、耳の近くで」「（これがお前の世界なのだよ、お前に丁度あたり前の世界なのだよ。それよりもっとほんたうはこれがお前の中の景色なのだよ。）」と叫ぶ声を聞き、自ら了解しているのと同じ考えかたである。

そこで『命令』との関係でこれ見ると、「コロイダーレな照明」と戦ったはずの詩人は、早くも敗北の未来を予見しているわけで、二篇を組み合わせ、兵隊とともに享樂的世界に耽溺した詩人が、戦慄すべき未来の姿を想定していると取るならコミカルな雰囲気にもなり、詩人が浮華に酔う世俗との戦いに敗れてよろめく未来の自身を想定しているとするなら、問題は幾分深刻なものになる。作品を耽美的に読むべきか、決意と読むべきかはここでも決められないが、いずれにしても、作品を△負景二題▽の組み合わせとして見るなら、これが類型の域を越えて人の生き方に触れた思想性を孕んだマニフェストになって

くる。

四 モティーフ成立の周辺

作品の解釈は多様であつてよいとしても、詩人の心意のありどころを求めて作品成立の背景をもう少し探るとすれば、もう一つの関連作『産業組合青年会』が注目される。これは詩人が意図的に組み上げたテキストというのではないが、先にも少し述べた通り、『命令』と『産業組合青年会』とは、一連のメモから枝分れた二つの作品と推定されるからである。『命令』と『産業組合青年会』の舞台とモティーフの共通性を簡単に確認しておけば次のようなところである。

『産業組合青年会』の下書稿に先立つ使い古しの赤罫詩稿用紙に書かれた「草稿的紙葉」に「まっくらな並木のはてで／見えるともない遠くの町が／ぼんやり赤い火照りをあげる」とあり、また「ここはたしか五郎沼の岸で／西はあやしく明るくなり／ぼんやりうかぶ松の脚には／一つの星も通つて行く」とある。五郎沼とは、花巻市街から約一〇キロ北にあたる日詰の国道四号線ぞいにあり、今も水鳥が多く戯れる静かで龍の伝説を持つ溜池である。情景にも『命令』にそっくりのところがある。

モティーフに注目して作品を見れば、次の通りである。定稿から引用する。

三三三 産業組合青年会

一九二四・一〇・五・

祀られざるも神には神の身土があると

あざけるやうなうつろな声で

さう云ったのはいったい誰だ 席をわたったそれは誰だ

……雪をはらんだつめたい雨が

闇をびしびし縫ってゐる……

まことの道は

誰が云ったの行つたの

さういふ風のものでない

祭祀の有無を是非するならば

卑賤の神の名にさへもふさはぬと

応へたものはいつた何だ いきまき応へたそれは何だ

……ときどき遠いわだちの跡で

水がかすかにひかるのは

東に置む夜中の雲の

わづかに青い燐光による……

部落部落の小組合が

ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち

村ごとのまたその聯合の大きなものが

山地の肩をひとつとこ砕いて

石灰岩末の幾千車かを

酸えた野原にそゝいだり

ゴムから靴を铸たりもしやう

……くろく沈んだ並木のはてで

見えるともない遠くの町が

ぼんやり赤い火照りをあげる……

しかもこれら熱誠有為な村々の処士会同の夜半

祀られざるも神には神の身土があると

老いて眩くそれは誰だ

最初の三行に、「熱誠有為な村々の処士会同の夜半」を支配した、

一つの霧田氣によって感じられる存在とも言うべきもの、すなわち「うつろな声」でありながら、なお「まことの道」を主張する詩人を

「あざけるやう」に「祀られざるも神には神の身土がある」と自己を主張する存在に強い怒りを打ち出している。つぎにこの日の天気は回復に向つてゐるのだが、ここでは時雨がいくらか残つたのだからか。

「雪をはらんだつめたい雨が」「びしびし縫」う闇に包まれた自身を振り返り、「祭祀の有無を是非するならば／卑賤の神の名にさへもふさはぬ」が、「まことの道」もまた自立したものだと思まき、自分に確かめ、「遠いわだちの跡で」光る「わづかに青い燐光」に促され

れ励まされて多くの農業改善事業への抱負が語られる。にもかかわらず、「くろく沈んだ並木のはてで／見えるともない遠くの町が／ぼんやり赤い火照りをあげる」のを見つつ、「熱誠有為な村々の処士会同の夜半」に「祀られざるも神には神の身土があると／老いて眩く」多

分詩人自身の未来の失意の姿がイメージされている。「祀られざるも神には神の身土があると／あざけるやうなうつろな声」は詩人の怒りの対象であり、詩人は「祭祀の有無を是非するならば／卑賤の神の名にさへもふさはぬ」と自覚しつつ「まこと」を孤独に守つてゐる

が、「祀られざるも神には神の身土があると／老いて眩く」のもまた、

未来の詩人に擬せられている。

この点さえ理解されれば、何者かへの挑戦と、農民への配慮と、敗北の予感の点で『命令』と『未来圏からの影』を組み合わせたモティーフが、この一篇の底に潜められているのはもはや明らかであろう。「わづかに青い燐光」が農業改善事業の夢を語ることを促し、「遠くの町」の「ぼんやり赤い火照り」が、詩人の不安を呼び出す形になっている点も注目される(後掲表3参照)。

『産業組合青年会』の日付は一九二四年一〇月五日だが、下書稿に先立つ「草稿的紙葉」がすでに一九二六年末から一九二七年ころつかわれたとされる赤野詩稿用紙に書かれているから、作品の成立は一九二六年九月発表の「心象スケッチ／負景二篇」の方が早い。しかし、三二三番の『産業組合青年会』の日付が一九二四年一〇月五日であるということからすれば、この日が最初のメモを得た日であろう。詩人はこの一部に一月二日の背景を与えて三二三番の『命令』をまず成立させたが、モティーフにはもとのメモと共通のものがあつたはずで、『命令』に耽美的なものが加わつたとしても、それはおそらく副次的なものでしかないであろう。反面、詩人が戦いの標的に選んだ浮華の灯の背景にあるものが何であるかも明らかにし、作品成立の思想的背景にも注目されなくてはなるまい。その時注目されるのが、「産業組合青年会」における詩人の怒りの対象である。作品で詩人はそれに「祀られざる神」の名を与えた。その実態が何か、次の問題はこの点に絞られてくる。

ここでは、作品を作者が構想していたテキストの中で捉え直し、あるいはモティーフの底にある詩人の問題意識を掘り起こしてみたのであるが、もしここに『有明』(作品番号七三、日付一九二四・四・二

〇・)を想起するならば、外山への道から盛岡の町の灯を望み見て「滅びる最後の極楽鳥が／尾羽をひろげて息づくやうに／かうかうとしてねむつてゐる／それこそここの林や森や／野原の草をつぎつぎに食べ／代りに砂糖や米綿を出した／やさしい化性の鳥であるが／しかも変らぬ一つの愛を／ わたしはそこに誓はうとする」と描いた時の詩人の思想とは、大きな変化があつたことがわかる。この変化を詩人に促したものはなんであろうか。

五 詩人を取り巻く状況

この詩人は、危機的状況に直面すると不思議な声呼び出すのだが、『産業組合青年会』で「祀られざる神」の名を与えられたものもそうした存在をイメージさせる。かつてこれに良く似た声が、トシ挽歌群において詩人の信仰を脅かし、嘆きを嘲笑う存在として登場したことがある。『春と修羅』第一集の「無声慟哭」の章の「白い鳥」で詩人がトシの名を呼ぶと、「ゆふべは柏ばやし月のあかりのなか／けさはすずらの花のむらがりひのなかで／なんべんわたくしはその名を呼び／またたれともわからない声が／(中略)／わたくしを嘲笑したとか」という形で登場してから、地霊的なものの形をとって長く詩人を苦しめている。『青森挽歌』で詩人はこれと格闘し、『宗谷挽歌』ではこれを鬼神と呼んで超克する。以後、この地霊的なものは『鈴谷平原』でかすかにその咳払いを残してしばらく姿をひそめていた。ここに登場している主のない声にも、同様の雰囲気がある。

この地霊的な形を取って現れるものすべてについて見るとすれば、詩作品だけ取り上げても多面的な姿を見せており、これだけで別に取

り上げるべき問題と思われるので、ここでは深く立ち入らないで、ここではこうした声が詩人に大きな脅威を与える存在の象徴として作品に登場していることを確認するとどめて、詩人がここで直面している問題は何かを、次に考えてみたい。

筆者にこの時期の詩人が抱えていた問題全体の真相がはっきり掴んでいるわけではなく、あるいは複合する問題があるのではないかと臆測もするのだが、一つだけ明らかなのは『雲』(一九二四・九・九)で「いっしょうけんめいやってきたといっても／ねごとみたいな／にぎりさけみたくないことだ」と自分の過去の努力に対する徒労感をもらして以後、作品のモチーフに暗いものが目立つことである。『秋と負債』(一九二四・九・一六)生前発表形式では「ポランの広場の夏の祭の負債から／わたくしはしかたなくこゝにとゞまり直立するけれども／(中略)もうわたくしはあんなso-soな灰いろのけだものを二度とおもひだす要はない」と不思議な言葉を記している。「南のはてが」(一九二四・一〇・二)下書稿(一)では「もう今夜からおれは落ち目だ」とし、下書稿(二)になると、時期的には後日の書き込みだが、「わびしい仕事をみつけるのだ……」「あまい郷里といふものが／まもなくひとに落ち目を贈り／そしてしづかにあざわらふ……」と付け加えて辞職の意思さえも示している。賢治が学校を退職した理由としては、清六氏が伝える父親の町議会議員選挙にからんだ学校内のスキャンダルがいわれているが、この時期はまだその選挙も始まる以前である。そして『産業組合青年会』の前日の日付を持つ『昏い秋』(一九二四・一〇・四)には「最後のわびしい望みも消えて」という言葉が見える。詩人が何かに追い込まれているのがひしひしと感じられる。

『産業組合青年会』と同日の日付を持つ「夜の湿気と風がさびしくいりまじり」の下書稿(二)の『業の花びら』には、いかにもこれを踏まえてであるかのように「どんなことが起らうと／わたしはだまって歩いて行くだけだ」とも記している。

この一連の言葉の背後にあるのは何かが問題だが、この年の夏休み中の八月には生徒を指導して学校劇を成功に導いたし、その成果と評価についてはすでに多くが言われており、富田博之などの研究もすでにあるが、そうした成果にもかかわらず夏休み明けにはこれが詩人に「ポランの広場の夏の祭の負債」と意識されている点に注目すれば、この精神的落ち込みの陰には、いわゆる岡田良平文相の学校劇禁止令の影響が考えられる。これは文相が八月六日地方長官会議において教育上の新主義鼓吹者の監督強化を指示し、学校劇の流行を批判禁止したもので、九月三日に次官通達が出されている(『学制百年史』)。時期も一致するし、やがて教え子に学校辞職の決意を語るのと同時に、農民劇団をつくる構想をもらしている点とも符節が合ってくるからである。

「岩手日報」は九月一〇日に「当市の女学校でも白粉劇は罷りならぬ」といった見出しで、九月一三日には「岡田文相が学生劇禁止／更に厳命通牒」といった見出しでこの動きを報じている。『雲』(一九二四・九・九)の反応は新聞報道より一日早く、『秋と負債』(一九二四・九・一六)も新聞報道と直接的関連を指摘できるわけではないが、文部省の通牒が直轄学校長宛てに発せられたもので、これが地方行政に反映されて行く過程を考慮すれば、詩人の反応はおおむねこれに添うものであり、かなり敏感であったということができよう。

花巻農学校の学校劇は賢治が一人で推進していたもので、彼が就職した直後から「学校で文芸を主張して居ります。芝居やをどりを主張して居ります。けむたがられて居ります。笑はれて居ります。」⁽¹⁰⁾といった空気の中で、実践されてきたものであった。これから三年を経ようやく夢の一部が実現すると同時に、政府から突然冷や水を浴びせられた形になったことは間違いない。長野県では『護寺院ガ原の仇討』を教材としたことですら、教科書外の教材を扱ったということ⁽¹¹⁾で懲戒免職にするといった教育の画一化が進められた例も報告されている。学校の現場を襲った空気はおよそ察せられよう。一転して政治的逆風の中で詩人がおかれた位置には厳しいものがあつたであろうが、賢治に対する理解者が周囲にはたして幾人いたか疑問である。のみならず『秋と負債』で詩人が「あんなの^{あんなの}な灰いろのけだもの」と言ったものも、具体的な何かがあつたのをさすのかもしれない。下書稿(二)は黄野(222行)詩稿用紙であるから後のものになるが、それには「ポランの広場の夏の祭の負債から／(中略)／いろいろな目にあふのであるが」とも記されており、「『陰気の狼』と／あだなをもてる三百」(文語詩「かれ草の雪とけたれば」)と呼ばれた人物も詩人の周辺にいたらしいからである。「南のはてが」の「あまい郷里といふものが／まもなくひとに落ち目を贈り／そしてしづかにあざわらふ……」⁽¹²⁾という言葉には、容易ならざる情況の変化といったものを受けとめる詩人の姿勢も滲んでいる。

六 結語

では、こうした状況と、作品が孕むモティーフとの間に具体的関連は認められるであろうか。『産業組合青年会』と同日の日付を持ち、詩句の上でも下書稿段階で、幾層かの交流を見せる「夜の湿気と風がさびしくいりまじり」の下書稿(一)『業の花びら』には、次のように記している。

三一四 業の花びら

一九二四・一〇・五・

夜の湿気とねむけがさびしくいりまじり

松ややなぎの林はくろく

そらには暗い業の花びらがいっばいで

わたくしは神々の名を録したことから

はげしく寒くふるえてゐる

ああたれか来てわたくしを抱け

しかもいったい

たれがわたくしにあてにならうか

どんなことが起らうと

わたくしはだまってあるいて行くだけだ

……どこかでさがが鳴いてゐる……

松並木から雫がふり

空のずるぶん高いところを

風がごうごう吹いてゐる

わづかのさびしい星群が

西で雲から洗ひ出されて

その偶然な二つつが

真鍮ブラズの芒で結んだら

巨きな秋の草穂の影が

残りの雲にうつたりする

この下書稿(一)の段階で筆者の目に着くのは、詩人の深い孤独感である。下書稿(二)の手入れの段階で「ああ誰か来てわたくしに云へ／億の巨匠が並んで生れ／しかも互ひに相犯さない／明るい世界はかならず来ると」の詩句が加えられるには、まだ時間が必要だった。しかもこの下書稿(一)への書き込みには、全集校訂者の見方によれば「わたくしは神々の名を録したことから」とある部分に差し替えるつもりでか「山地の神を／舞台の上に／うつしたために」とある。学校劇『種山が原の夜』の問題はやはり尾を引いている。

「はげしく寒くふるえてゐる」のは、前夜来の雨が夜に入って天気が回復に向かう場面での実感に基づいてもいようが、さらに「どんなことが起らうと／わたくしはだまってあるいて行くだけだ」と、詩人が覚悟したとき「どこかでさきが鳴いてゐる」のに合わせて「空のずるぶん高いところを／風がごうごう吹いてゐる」のを捉えているのも象徴的である。この日の風は、昼間強かったが、夜になると八時に四

・三メートルを記録しているのが最も強い程度であるから、この風は詩人の直感だけが捉えたはるか上空のものにはかならない(表3参照)。こうしたモチーフを抱えた詩人の目に、露営する兵士の姿がふれたとき作品『命令』は成立した。

この穏やかな、一見ナンセンス・ユーモアと見られた作品が、実は内面にこれだけのものを含んだマニフェストであったということは、筆者にも驚きであったのだが、このような表現を詩人が求めた理由は、おのれを修羅と自覚して自己否定の契機を含む自己認識を持つ詩人ゆえであろうか。表面おだやかな湖水ほど、底は深いともいう。詩人の心の深さを垣間見た思いである。

ただ、『未来圏からの影』を併せて発表したテキストにしたがって見直すと、日本文学に現れるロマンチズムの対社会的脆弱さは一般的なことだが、個人が社会への抵抗に立ち上がろうとするとき、すでに我が身の破滅を予見しているところに、賢治もまた同様のものがあるようである。

表1 一九四二年二月三日(三三「命名」創作日付の日)

風向風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	時刻	天候
E 0.8	S	5	—	—	1	⊙
WSW1.0	S	7	—	—	2	⊙
N 2.6	Sk	5	—	—	3	⊙
SE 2.8	Sk	7	—	—	4	⊙
SE 2.4	Sk	8	—	—	5	⊙
NNW2.2	Sk Sc	8	—	—	6	⊙
NW 1.3	Kc Sk	7	—	—	7	⊙
NNE8.1	Sk Kc	4	—	0.30	8	⊙
N 8.2	Sk Kc	9	—	0.75	9	⊙
N 9.2	Sk Kc	10	—	0.80	10	⊙
NNE9.5	Sk Kc	8	0.0	0.45	11	⊙
NNE5.3	Kc Ck Sk	9	—	0.85	12	⊙
NE 13.6	N Sk	10	0.7	0.90	13	●
NNE11.2	Kc S	3	0.1	0.10	14	⊙
NNE12.3	Kc	3	—	0.85	15	⊙
NNE 8.5	Kc Sk	2	—	1.00	16	⊙
N 8.2	S	1	—	0.55	17	⊙
ENE5.0	Kc	2	—	—	18	⊙
NE 5.7	Kc	3	—	—	19	⊙
NNE6.3	S	2	—	—	20	⊙
NW 3.3	—	0	—	—	21	⊙
NE 4.9	—	0	—	—	22	⊙
NE 7.2	Sk	3	—	—	23	⊙
NW 4.0	Sk	3	—	—	24	⊙

表2 一九五三年一月五日(「未来園からの影」創作日付の日)

風向風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	時刻	天候
WSW2.3	S	9	0.0	—	1	⊙
W 3.2	S Sk	7	—	—	2	⊙
NW 2.1	Sk S	8	—	—	3	⊙
NNW1.4	Sk S	4	—	—	4	⊙
SE 1.8	Sk S	2	—	—	5	⊙
SW 1.8	Sk	2	—	—	6	⊙
W 1.9	Sk	1	—	—	7	⊙
NE 1.2	Sk	4	—	0.80	8	⊙
E 1.3	Sk	6	—	0.75	9	⊙
NW 6.0	Sk Sc	4	—	0.65	10	⊙
N 6.4	Sk Sc	5	—	1.00	11	⊙
WNW6.5	Sk Sc	7	—	1.00	12	⊙
WNW8.2	Sk S Sc	4	—	0.90	13	⊙
NW 6.9	Sk Sc S	4	—	1.00	14	⊙
NW 5.5	Sk S	9	—	1.00	15	⊙
SSE 1.7	S Sk	8	0.1	0.50	16	⊙
W 2.5	Sk Sc	8	—	0.75	17	⊙
NW 6.0	Sk S	8	—	—	18	⊙
SSE 2.4	Sk	6	—	—	19	⊙
NW 1.3	Sk	7	—	—	20	⊙
E 2.4	Sk	7	—	—	21	⊙
W 2.6	Sk	6	—	—	22	⊙
NW 7.4	Sk	3	—	—	23	⊙
NWN7.5	Sk	6	—	—	24	⊙

表3 一九四四年一月五日(「産業組合青年会」葉の花びら」創作日付の日)

風向風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	時刻	天候
NNE1.2	S	10	0.2	—	1	⊙
SE 1.6	S	10	—	—	2	⊙
NNE5.3	S	10	—	—	3	⊙
WNW5.8	S	10	0.1	—	4	⊙
N 3.5	S	10	—	—	5	⊙
ENE1.8	S Sc	10	—	—	6	⊙
SW 1.2	S Sc	10	—	—	7	⊙
W 1.6	S Sc	10	—	—	8	⊙
WNW5.0	Sc S	10	—	—	9	⊙
WNW2.9	Sc Kc	10	—	—	10	⊙
WNW7.6	Sc Kc K	8	—	—	11	⊙
W 6.3	Sc Ck	8	—	—	12	⊙
S 6.0	Sc Ck	9	—	0.10	13	⊙
WSW7.2	Sc Ck	9	—	0.25	14	⊙
S 3.3	Sc Ck	6	—	—	15	⊙
SW 4.1	Ck Sc	6	—	0.80	16	⊙
WSW3.3	Sc Ck	10	—	0.95	17	⊙
W 3.1	Sc Kc	9	—	0.40	18	⊙
E 1.7	Sc Kc	8	—	—	19	⊙
SE 4.3	Sc K	6	—	—	20	⊙
SE 3.2	Kc	1	—	—	21	⊙
SSE 1.5	Kc	0	—	—	22	⊙
SE 1.3	S	2	—	—	23	⊙
SSE 1.5	S Sc	2	—	—	24	⊙

注 ○快晴 ⊙晴れ ●雨 ×雪 二級 日照時数はデューラゲン式。

○巻雲 Cs 巻層雲 Ck 巻積雲 Kc 高積雲 Sc 高層雲 Sk 層積雲 N 乱雲(雨雲) K 積雲 Kn 積乱雲 S 層雲
 雲の記号は、現行のものとなるため盛岡地方气象台のマニユアルに記したが、雲形の記録は、
 量の多い方から記載してある。この表は、工藤菫氏の教示を得て、盛岡气象台の資料にもとづき筆者が
 作成した。

注1 『新修宮沢賢治全集』三卷(一九八〇・六 筑摩書房)解説

2 宮城一男『宮沢賢治の生涯』(一九八〇・二 筑摩書房)

3 佐藤成『証言 宮澤賢治先生―イーハトーブ農学校の1580日―』(一九九二・六 農文協)によれば、「十一月一日 演習見学のため職員生徒一同黒沢尻方面へ向ふ。」とある。

4 拙稿「『春と修羅』第二集における番号と日付に関する一考察」(『宮沢賢治研究Annual』vol. 3へ投稿中)本稿は、この論文を補充する意味もあるので、併せて見て頂けると幸甚である。

5 佐々木幸夫著『花巻温泉物語』(一九八八・六 熊谷印刷出版部)

6 拙稿『宮沢賢治トシ挽歌の行方』(島根大学「国語教育論叢」創刊号 一九九一・九)参照。

7 富田博之『賢治と南吉の演劇世界』(一九九二・一 国土社)

8 この時の通達は、「直轄学校長、大学令ニ依ル公私立大学長、公私立高等学校長、公私立専門学校長(実業専門学校長ヲ含ム)」「宛。内容は「学生生徒ニシテ演劇的行動ヲ為ス者ノ取締ニ関シテハ明治四十二年本省ヨリ訓令ヲ発セラレ尚過日地方長官會議ニ際シテモ特ニ本省大臣ヨリ訓示ノ次第モ有之タル處語学練習会等ニ於テ脂粉ヲ施シ仮装ヲ為シ演劇興行ニ近キ行為ヲ為スモノ往々有之尤此ノ如キモノ因ヨリ訓令ノ精神ニ照ラシ不可然義ニツキ爾今貴学(校)ニ於テモ十分御監督ノ上萬遺憾ナキヲ期セラレ度依命此段通牒ス」というもので、備考として「別紙ニ参照トシテ四十二年一月九日訓令(直轄学校長并地方長官宛)ヲ浄写添付スルコト」とある。(この資料の入手については島根大学文書課の二瀬勝康

氏のご配慮を得た。記してお礼申し上げます。)

この文書の宛先に中等学校長は含まれていないから、花巻農学校で詩人が直接この文書に接したのではないであろう。地方長官を通じて命令の趣旨が通達されるまでにくらか時間があつたと考えられる。一〇月五日に「最後のわびしい望みも消えて」と最後の断念を記すまで、詩人の事態の受け止め方に微妙な変化があるのは、この点と関わっているのではあるまいか。

9 書簡二〇五、(一九二五・四・一三、杉山芳松宛)

10 書簡一九九、(一九二一・一二、保坂嘉内宛)

11 国立教育研究所『日本近代教育百年史』教育政策(1)(一九七三) p.三二七 ~ 三二八